

三一の神と日本神話

2002年5月27日

ヨハネ 皆川 尚一

(創世記1:1~5)

1. 信仰の土着化か

紀元7世紀に秦氏の首長である秦河勝が、聖徳太子に会って「あなたの信ずる神は何か」と尋ねられた時、「天之御中主神」(あめのみなかぬしのかみ)と答えたと言われます。秦氏は原始キリスト教のユダヤ人キリスト者であったと考えられますが、なぜ「ヤーウェ神(エロヒーム)」とか、「父・子・聖霊なる神」とか答えなかったのでしょうか？

久保有政先生は、「日本ユダヤ封印の古代史」の中で「つまり古代キリスト教を信奉していた秦氏はイスラエル宗教の古い伝統をも尊重しつつ、かつ日本的風土の信仰を模索していたのでしょう。」(p.155)と解釈しておられます。私は今回のレポートの中で、今一つの解釈の可能性をも示唆しました。それは日本の天皇家と結びついた仏教勢力の政治的な迫害から秦一族を護るための隠れ蓑として日本神話の神の名を用いた、一種の隠れキリシタンの動機があったかも知れない、ということです。しかし、それはあくまでも消極的な一時のがれの道でしかありません。秦氏すなわち日本に渡来した初代キリスト教徒たちは、自分たちの信仰を日本神話の形式ないし名称を用いて積極的に表明したものであるのです。

2. 三 の神の信仰

初代キリスト教徒の信仰は「三一の神を信ずる」ものです。ちなみに「三位一体」(ラテン語でトリニタス Trinitus)というのは神学用語であって、厳密な意味で用いられるようになったのは、AD5世紀のアウグスチヌスによってです。聖書にはこの用語はなく、聖書の神は「父と子と聖霊なる唯一の神」と表現されています。(コリント13:13、ヨハネ14:16~17)(コロサイ1:15~17、ヘブル1:2~3)。アンテオケのテオフィロス(AD180)は、「父・子・聖霊」を三福対(trias)と表現しました。父なる神は御子イエス・キリストを通し聖霊によって自らを啓示し、救いのわざを行われるというのが新約聖書の信仰です。この場合、父なる神は「天地の創造主、全能の父」と告白されます。

旧約では創世記1:1~5において「初めに神(エロヒーム)が天と地を創造された」と宣言されています。「エロヒーム」とは「エル」(力)の複数形ですから「全能の神、無限の力」を意味している「威厳の複数形」であるといわれます。が、それと同時にエロヒームの中に三一神の意味が含まれているとも解せられます。そして、神の似像としての人間の

霊、天使の霊も神の子（ベネ・ハ・エロヒーム）と呼ばれて、エロヒームの中に包含されて行くのです。（ヨハネ 10：34「あなたがたの律法に『私は言う。あなた方は神々である』と書いてあるではないか。神の言を託された人々が神々といわれているのであれば、父が聖別して世に使わされたものが『わたしは神の子である』といったからとて神を汚すことにはならない」とあります。（cf. Ps. 82：6）。ちなみに「エロヒームは『光あれ』と言われた。すると光があった。」（v,3）とあって、混沌たる水の中における聖霊の力が神の宣言によって発動して、先ず光が出現する。そして光が秩序を作り出す有様が語られています。この光は神ご自身の内側から出たものです。「有りて有る神」（エイエー・アシェル・エイエー）は、すべて有るものの根源です。神がある物を造られる方法は、ご自身の中からです。すべて有るものは、永遠にあり続ける神から出たものです。人の霊も神の分霊であり、地のちりから造られた肉体の中に神の分霊が入れられて、人は生きた者となるわけです。ですから創造と生成とは一つです。尚、ちなみに「ヤーウェ」（彼は有る）が受肉してイエス・キリストとなられたのです。

3 . 日本神話における三 神

日本神話の中に出て来る神々もこれに似ています。「古事記」というのはAD第8世紀に太安萬侶（おおのやすまろ）が編集したものです。「古事記」は「日本書紀」よりも成立年代が古く、その神話も体系が整っています。これは天皇が稗田阿礼（ひえだのあれ）という語り部に命じて暗誦させておいたものだと言われていますが、口伝というものはもっと古代から語り継がれて来たはずです。又、漢字が渡来する以前に、日本文字はなかったという説は大きな誤りです。日本には神武天皇以前に神代文字（じんだいもじ）というものがあります。「ヒフミヨイムナ」の日文字（ひふみ）と阿比留（あひる）文字があり、「アカサタナ ハマヤラワ」の上記（うえつふみ）の象形文字、そして「イロハニホヘト」の秀真文（ほずまふみ）他十数種類の文字があったことが「世界の文字の図典」（吉川弘文館）に記載されているのです。いわゆる神代は文字のない口伝だけの野蛮な世界ではありませんでした。日本には超古代からの歴史が口伝や文書によって伝えられて来ましたが、支配者の政策によって過去は消滅させられ、新しい歴史書として「古事記」「日本書紀」が編纂されたのです。その「古事記」のはじめはこうです。

「^{あめつちはじめ}天地初めて^{ひら}発けし時、^{たかまがはら}高天が原に^{みな}成れる神の名は

^{あまのみなかぬしのかみ}天之御中主神、^{たかみむすびのかみ}次に高御産巢日神、^{かみむすびのかみ}次に神産巢日神。

この^{みはしら}三柱の神は、^{ひとりがみ}みな独神と成りまして、身を隠したまひき。」

これは天地が開かれる前に天上界において、天地万物を造りだす造化三神が存在したことを述べたものです。造られずして自らなりいでた神、それが天の真ん中に在す神を中心に、三一性を保っていたという告白です。これは聖書の神と似ています。産巢日（むすび）というのは何かを生み出す力を意味しますから、高御産巢日が御子で、神産巢日が御霊に当たるかもしれません。従って、天之御中主の神は御父であるということになります。

4 . 天照大御神の正体

次に天照大御神（あまてらすおおみかみ）はイエス・キリストに似ているのです。「古事記」は日本国の国土を造り出した神々として、伊邪那岐命（いざなぎのみこと）と伊邪那美命（いざなみのみこと）の夫婦神が国生みをしたと述べています。その夫の方の伊邪那岐命が黄泉の穢れを清い流れの中で禊ぎ清めたとき、左の目を洗って生まれ出たのが天照大御神、右の目を洗ってうまれ出たのが月読命（つくよみのみこと）、鼻から出たのが須佐之男命（すさのおのみこと）でした。そして伊邪那岐命は、天照大御神には太陽のごとく昼の国を治め、月読命には月のごとく夜の国を治め、須佐之男命には海原を治めよと命じたのです。しかし須佐之男命は神意に逆らい、天照大神を妬んで高天が原に昇り、姉神の機織している家の屋根を剥いで、皮をむいた馬を放り込むという乱暴を働きました。それによって服織女が梭（ひ）で局所をついて死んだとありますが（古事記）、「日本書紀」の方では天照大御神自身が傷ついて「天の石屋戸」（あめのいわやど）の中に閉じこもってしまった。これによって高天が原も地上の国も真っ暗になってしまった。そして、ありとあらゆる災いがおこり百鬼夜行の有様となった。そこで占いの結果、真さかきを根こそぎにしたものを、石屋戸の前の広場に立て、上の枝に八尺（やさか）の勾珠（まがたま）をかけ、中の枝に八尺鏡（やたのかがみ）をかけ、天児屋命（あめのこやねのみこと）が祝詞を上げ、天宇受買命（あめのうずめのみこと）が、桶を伏せた上に乗ってタップダンスを踊りました。神懸かりして衣服を乱してストリップのようであったから、八百万の神がどっと笑ったのを聞いて天照（アマテラス）が細めに戸を開けた所を天手力男命（たぢからのおのみこと）が手を取って外に招じた。それで天地が明るくなった。須佐之男は重荷を負わされ、ひげを切られ、手足の爪を抜かれて追放されたというのです。

これは、聖書において、ロゴス（先在の神の子）が人の命であり光であった（ヨハネ 1：4）とあり、「すべての人を照らすまことの光があつて世に来た（1：9）ともあります。また、来るべきメシヤは義の太陽でありました（マラキ 4：2）。又、イエス様が十字架上で苦しみ死なれた時、昼は夜のように暗くなりました。そして葬られた墓は石屋戸でありました。イエス様は肉においては死なれましたが、霊においては甦りであり命であつて死ぬことなく、三日後に復活されました。そして十字架上の死を贖いの犠牲として多くの人々の罪を赦し、キリストに帰する者を救われるのです。

この点、天照(アマテラス)もまた死から甦って、日本国を照らす光となり悔い改めた須佐之男を赦して受け入れます。このとき須佐之男が献げたものが宝剣・草薙の剣であります。もちろん、似ているということは同じだということではありません。私が申し上げたのは、このように日本神話が生まれた背景にはユダヤ人キリスト教徒がもたらした聖書の福音があるのではないかということです。天照大御神の正体は、全人類をあまねく照らす義の太陽、人間として生きて、死んで甦った光の絶対神、イエス・キリストであると考えられます。飛鳥昭雄、三神たける氏は「このように天照大御神はイエス・キリストであり、ユダヤ人キリスト者である秦氏がその信仰を独自にアレンジしたのが天岩戸開きの神話である」と結論づけています。

5 . 伊勢神宮とキリストの再臨

原始キリスト教徒の日本への渡来は秦河勝よりも500年も昔から始まっていたらしいですから、日本の神話に対するキリスト教の影響はかなり昔からあったと考えられます。こうして日本民族は聖書とかなり関係の深い民であり、古神道の神が三一の神である証拠は、伊勢神宮は内宮(ないくう)と、内宮の別宮である伊雑宮(いさわのみや)、そして外宮(げくう)から成り立っていることです。

- (1) 内宮の祭神は天之御中主神(エロヒーム=御父)であります。
- (2) 伊雑宮の祭神は高御産巢日神(即ち天照大御神=ヤーウェ=御子イエス・キリスト)であります。
- (3) 外宮の祭神は神産巢日神(聖霊)であります。

藤原不比等が伊勢神宮を造るときに、伊雑宮に在ったイエス・キリストの血染めの十字架を強引に内宮に移した。それで現在は内宮の地下宮に聖十字架が安置されているといわれます。(飛鳥昭雄・三神たける共著「失われたキリストの聖十字架『心御柱(しんのみはしら)』の謎」(学研2002年2月5日発行345ページ参照)

従って伊勢神宮は三一の神を礼拝する礼拝堂であり、日本の皇室は皇祖、皇宗以来この信仰によって祭祀を行ってきたのであります。そしてやがて伊勢神宮が改変され、伊雑宮がそのヴェールを脱ぎ捨てて本宮となった後、天照大御神としてあがめられている真のメシア・イエスが再臨して真の神の国を打ち立てられることになるといわれます。(「心御柱の謎」393ページ参照)

以 上